

きんかくし考

——和式大便器の歴史——

Consideration of “KINKAKUSI”:

History of Japanese Squat Type Toilet Bowl

水 本 浩 典

MIZUMOTO Hironori

はじめに～「衣掛け」から「金隠し」へ～

2016年4月14日熊本県熊本地方をマグニチュード6.5の地震が襲った。「熊本地震」と名付けられた大規模な地震であった。この地震によって重要文化財建造物群として有名な熊本城も甚大な被害を受けた。地震発生の約1カ月前、2016年3月19日にNHKの番組「ブラタモリ」が様々な角度から熊本城をテーマにした番組を放送した。これは被災直前の熊本城の最後の雄姿を記録した貴重な映像にもなった。

この映像のなかで、熊本城にある有名な「空中トイレ」のエピソードについても言及している。出版された『ブラタモリ 6 松山 道後温泉 沖縄 熊本』¹⁾では、この「空中トイレ」についての興味深い説明はなぜか削除されている。

5 熊本城は「やりすぎ城」？

実はここにも珍しいものが。大天守と小天守の間あたりを見ると、建物の一部が石垣から宙に迫り出しているのがわかります。「空中雪隠」(p.103⑥)と呼ばれるこの施設、トイレが空中にある理由はいまだ謎…… (p.106)

放映された映像では、この空中トイレを説明する際、ナビゲーター役を勤めた鶴崎俊彦（熊本城調査研究センター文化財保護主幹：放映時の所属・肩書）が、「空中トイレ」では、どちら側を向いてしゃがむかについて問いかけをしているシーンがある。タモリが「きんかくし」がある側を向いてしゃがむと答え、鶴崎が「昔はきんかくしがある方にお尻を向けて、着物の裾をきんかくしに掛けたそうです」と説明し、「衣かけ」が訛って「きんかくし」になったと、「きんかくし」の語源を紹介している。本稿のテーマである「きんかくし」について、NHKという公共放送が真面目

に解説したエピソードでもある。

そこで、本稿では、「衣かけ」という用語が「きんかくし」へ訛っていったという説も含めて、「きんかくし」について考察を進めていく。

「プラタモリ」熊本城編でも言及されている「衣掛け（きぬかけ）」が訛って「金隠し（きんかくし）」になったという説の由来について考えてみたい。

本稿においても有益な先行研究として参考にした『トイレの考古学』に所載された清水久男「古今東西トイレよもやま話」に、「衣隠（きぬかく）し」について言及した一節がある。

十二単に身を包む平安貴族の姫が、樋殿に入るときは大変です。侍従は、姫の打掛（うちかけ）を取り、袴（はかま）を脱がせ、長い髪を前に回し帯に挟みます。長い把手の付いた鳥居形、つまり T 字形の棒を樋箱の背後に据えこの棒を「衣隠（きぬかく）し」と呼ぶとも言われます、侍従がこの棒に姫の十二単の長い裾を掛けながら、十二単の中に樋箱を押し込んであげます。姫は、裾を背後の棒に引っ掛けたまま、脇を十二単で包み隠して、樋箱の上にしゃがみ、用を足します。現在の便器では、赤ちゃんのおまるのように、把手を手でつかんでしゃがむのですが、樋箱では把手がお尻側にあり、前後が逆だったことがわかります²⁾。（下線：筆者付）

清水は、樋箱に鳥居形＝T 字形の棒が付いており（図 1 参照）、後ろ向きに背後から差し入れ、用を足していた。現在の赤ん坊が使用するおまるの使い方とは前後が逆だったと説明している。



お尻側

こちら側が前

図 1 樋箱（筆者所蔵）

このように、樋箱の使い方を現在の「おまる」の使用方法とは前後逆だったと説明する文献を探してみると、『物語－ものの建築史 便所のはなし』³⁾においても同様の文章と図を提示している。

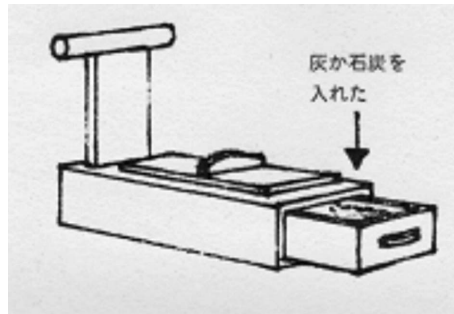


図2 箱便所（江戸時代の大名が使っていたもので、樋殿の面影を伝えている。）

注：『便所のはなし』p.5の図及び説明文を転載

文献を遡ってみると、トイレ研究者として第一人者でもある李家正文が『住まいと厠』において、同様の表現で樋殿で使用した樋笥の使用法を説明し、「後世の厠の蓋に長い手のあるものはこのT字型の裾掛けの名残りである」と説明している⁴⁾。

李家が同著のなかで提示した樋笥は、「樋笥の図（江戸時代）」（図3参照）と明記している。

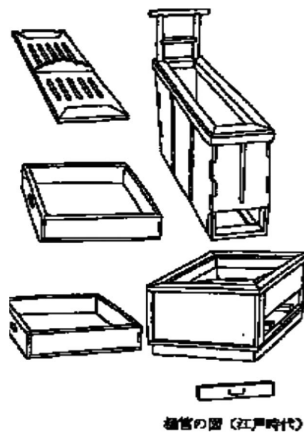


図3 李家が提示した樋笥

注：同著『住まいと厠』p.125から転載

平安時代の樋笥の使用法を説明する際に参考として提示する図が江戸時代の樋笥の図を使い、読者に樋笥の使用法をイメージさせているわけであるが、平安時代と江戸時代では時代に不適合であり、説明用の図としては適当ではない。

このように長く排泄を室内でする際に使用された樋笥について、

衣掛け→きんかくし説

衣隠し→きんかくし説

裾掛け→きんかくし説

があるが、いずれも、論の根拠となる典拠は明示されてない。試みに『日本国語大辞典 第二版』で検索しても、「きぬかけ」も「きぬかくし」も「すそかくし」も用語として採録されていない。

1. 平安時代の「樋」・大壺・虎子

『延喜式』第十七卷内匠寮に、以下のような条文がみえる。

雕木一脚、長一尺七寸、広一尺三寸、高一尺一寸、木工製作之、樋一合、高九寸、径九寸五分、虎子一合料、漆二升四合、彫木八合、樋一升、二合、虎子四合、（後略）⁵⁾

「樋」や「虎子」は、木製の漆器。「雕木」とは、樋を使用する際に用いる台のことである。「樋」や「虎子」は助数字「合」で表現してある。つまり「樋」は口が円形の筒形（あるいは桶型）のものであったので、数える際は「合」を使用した。

橋本義則は、「平安時代のトイレと便器に関する予察」⁶⁾という論考のなかで、平安時代のトイレや便器について、正史（『続日本紀』～『日本三代天皇実録』）、古記録（『大日本古記録』・『増補史料大成』・『史料纂集』）、古文書（『平安遺文』）、儀式書（『西宮記』・『北山抄』・『江家次第』など）、法制史料（『延喜式』・『類聚三代格』など）、古文書（『大日本古文書（編年文書）』・『寧楽遺文』など）平安時代の漢文史料をほとんど全て博搜したと書いている。その結果、

『類聚雜要抄』巻2に大治二年（1127）白河法皇が大炊（御門富小路）殿へ遷御した時の調度について記した記事があり、便器として私宮・虎子宮、トイレに当たる空間として隠所が見える。まず便器のうち、虎子宮はその名称からして当然虎子を入れる宮であり、これがそのまま便器であったわけではない。虎子宮は台の上に載る方形のもので、下（上の誤りか）には牙縁の蓋が付いていたらしい。またこの虎子宮は御帳の跡方の隠所に置かれていたと書かれている。隠所は、この場合虎子宮の置かれていた場所であるから、いわゆるトイレに当たる空間かと思われるが、しかしこのことが直ちに一般に隠所がトイレのことを指す言葉であったと言うことにはならない⁷⁾。

と総括している。そして、松井彰との討論のなかで、次のような会話をしたことが記録されている。

松井（奈良国立文化財研究所、当時）：岩波書店の『広辞苑』で「樋殿」を調べているとき気になったのですが、「樋箱」というのは、どういう使い方をするものなのですか。

橋本：「樋箱」は出てこない。（中略）少なくとも、平安時代にはないです。⁸⁾

このように橋本は、「樋箱」の存在を常識とする通念を、さりと否定している。

同じく黒崎直も『水洗トイレは古代にもあったートイレ考古学入門ー』⁹⁾のなかで、上掲の『延喜式』の条文に言及して、次のように書いている。少し長くなるが引用してみたい。

『延喜式』巻一七の内匠寮樋類条にも便器と思われる調度の製作を示す記載がある。

そこには「彫^{えり}(雕)木一脚」「樋一合」「虎子一合^{おおつぼ}」の作成に必要な材料などが書き上げられており、彫木は序数詞「脚」で、樋と虎子は「合」でもって数えられている。このことからすると脚は方形で足付きの台のようなもの、合は蓋付きのものと見なせようか。虎子は尿を受けるいわゆる小便壺だから、彫木と樋はウンチを受ける便器の可能性はある。ただ彫木について橋本さんは、これを便器だろうと想定するものの、「よくわからない」と断定を避けている。

一方、保立道久さんがこの彫木について、興味深い見解を示している。古代のトイレを読み解くキーワードの一つとして「穴」に注目する保立さんは、平安時代の儀式書である『雅亮装束抄』一に載せる「大饗の饗宴の尊座休所」の場面を引用し、排泄のためにあけ(彫)られたものが彫穴であろうと見なす。すなわち「便宜の所一間に御簾懸け回して、高麗の畳一帖を敷きて、大臣の尊座の折りは大壺を置き、大納言には、板に穴をえ(彫)なるなり」の一文である。大壺は小便壺のことだから、大納言のための穴も開脚して座して使う小使用の穴ではないかと考えるのだ。(p.95・96)

ただし、『延喜式』のように虎子・彫木・樋をセットで捉えると、虎子・大壺は小便器で、樋は大便器となり、彫木がそのいずれに属するのか判断できない。ただ、彫木が序数詞「脚」で数えられたり、「台」と示されていることからすると、保立さんが推測するように「上面の板に穴を彫^えぐり、樋の上に置いて腰をかけて利用される台」である可能性が高くなる。その多くは樋の上にかぶせて用いられる大便器だが、「大饗の饗宴の尊座休所」の場面のよう小便器に代用されることもあったと理解しておきたい¹⁰⁾。(p.96・97)

ここで、黒崎は、『延喜式』の史料に記載される「彫^{えり}(雕)木一脚」「樋一合」「虎子一合^{おおつぼ}」について、「虎子・彫木・樋をセットで捉えると、虎子・大壺は小便器で、樋は大便器となり、彫木がそのいずれに属するのか判断できない」と述べている。

しかし、『延喜式』内匠寮樋類条の記載順は、「彫^{えり}(雕)木一脚」「樋一合」「虎子一合^{おおつぼ}」であるのに、黒崎は、「虎子・彫木・樋をセットで捉えると」と書いて、条文にはない「大壺」を加えて小便器と解し、そうなると残る「樋は大便器と」区別し、最後に残った彫木が大便器に属するものなのか小便器に属するものなか「判断できない」と述べているが、黒崎自身も「虎子」が「おおつぼ」であると言っており、虎子・彫木・樋をセットで捉える必要は存在しない。

黒崎は、前掲の著書のなかで、「便器」を意味する語彙をまとめている。それによると、

[和語] おまる・まる(御虎子・御丸・虎子・丸)
 おおつぼ(大壺)
 ひ・ひのはこ(樋・樋筥)
 しのはこ(私筥・清筥・私器・清器・尿管)

と、まとめている。

黒崎が整理した「和語」のなかに「ひのはこ（樋筥）」を入れているが、いずれの辞書類からの抽出なのか明示する必要がある。橋本が博搜した諸史料、少なくとも、『倭名類聚抄』・『類聚名義抄』・『色葉字類抄』には、「樋筥」の語は存在しない。

国文学の立場から、平安時代貴族邸宅にある便器について考察した論文に、増田繁夫「近江君の『おほみ大壺とり』考－大壺・虎子・樋・樋殿－」¹¹⁾がある。この論文のなかで、それぞれの用語について適切な分析を提示してくれている。用語の部分をまとめてみると次のように書いている。

「樋」「虎子」「大壺」はそれぞれ区別されている。(p.240)

「樋」や「虎子」は木製の漆器であり、「大壺」は、もと土器の壺だったのであろう。(p.240)

「彫木」の名からすれば、尻部をのせるところに穴を彫ったもので、樋を使用するときに腰をかける台のことではなかろうか。(p.241)

延喜式匠寮式に見える「樋」は、その形状が「樋 [高九寸、径九寸五分]」と表示されている。これは碗などの口が円形のものは、「大碗 [径八寸六分深三寸]」などと、深さと口径とを表示し、筥などの方形のものは「櫛筥四合 [各長一尺一寸五分、広位置尺三寸、深一寸五分]」と、長さ・広さ・深さ（高さ）を表示する記載法からすれば、この「樋」は口が円形の筒型（あるいは桶型）のものだったのではないか。憶測すれば、古くは壺が用いられていたのが、後に室内用などにそれを模した木製のものが作られた、といった事情も考えられるのである。(p.246)

「虎子の箱」については、

……こしのはこといふものあり、その舁うるはしりかぶりの筥の大きさにして、四角なり、蒔絵あり、……（雅亮装束抄・一）。虎子筥 [其舁四方、下在牙縁・蓋也、又有台云々] ……（類聚雑要抄・二）。などに見える。方形の筥で蒔絵などをしていたのである。……「こしのはこ」は「しのはこ」とも呼ばれ、「尿管」とも表記されることもある（前田本字類抄）。「私筥一口」（類聚雑要抄・三）などにあるのも、やはり「しのはこ」とよむのであろう。(p.247)

増田は、有名な説話のひとつとして古くから言及される『今昔物語』巻三十第一話にも言及している

今昔物語巻三十第一話の例の平中説話では、本院侍従の樋洗が洗いに行こうと持って出た樋は「箱」と呼ばれて「香染ノ薄物」で包まれ、「琴漆（金漆）」を塗ったものであったという。(p.245)。

ちなみに『今昔物語』巻三十「平定文、仮借本院侍従語第一」を検索してみると、「筥」と見えるが、「樋筥」とは書いてない。岩波書店本『今昔物語』では「□ノ筥洗ヒニ行カムヲ伺、」とあ

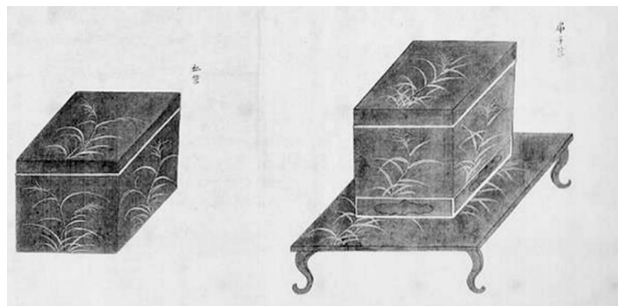
り、「□ノ筥」の「□」にどのような字が入るのかは不明としている¹²⁾。他の文にも「筥」とだけ書いてあり、「樋筥」とは書いていない。増田が「樋は「箱」と呼ばれ」と考察した部分は失考である。「樋」と「筥」とは別ものであって、「樋筥」または「樋箱」が存在したわけではない。

ここでも、「樋」について、「樋箱」という後世のイメージが研究者の固定観念として定着していることをうかがわせる。けっして平安時代の貴族邸宅に、「樋箱」が置かれていたわけではなく、増田が明解に提示してくれたように、『延喜式』条文にある「この『樋』は口が円形の筒型（あるいは桶型）のものだった」と考えるのが正鵠を射ていると考えている。

『類聚雑要抄』巻二 調度二に、

虎子筥 其体四方下在牙縁蓋也 又有台云々

とあり、『類聚雑要抄指図巻』¹³⁾が「私筥」と「虎子筥」がどのようなもってあったのかを図示してくれている（図4参照）。しかし、その図は、まさに「筥」の図であり、筥のなかに収まっていた什器の様子はうかがうことができない。



私筥

虎子筥

図4 『類聚雑要抄』にみえる私筥と虎子筥

注：『類聚雑要抄指図巻』（川本重雄・小泉和子編、中央公論美術出版、1998。P.44 から転載。）

2. 描かれた便所と「きんかくし」

本節では、絵巻などに描かれた便所について考察していく。

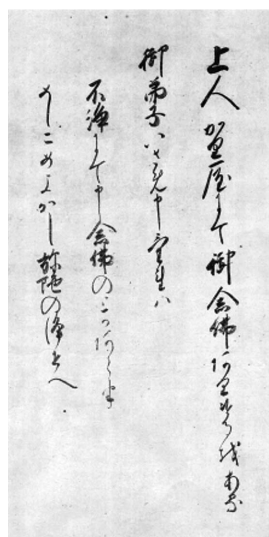
『慕帰絵詞』は、本願寺三世覚如（1270-1351）の生涯を描いた伝記絵巻で、現存10巻（西本願寺所蔵）となっている。観応二（1351）年に父・覚如を追慕して次男の慈俊従覚が詞を撰述して制作した絵巻であり、時代的には南北朝時代の作である。この『慕帰絵詞』巻四の末尾の絵に、廁から用をたした僧が、黒染めの衣を脱いで肩にかけ急いで出て来た様子が描かれている（図5参照¹⁴⁾）。



図5 『慕帰絵詞』 巻四に描かれた便所

注：小松茂美編『続日本の絵巻 9』中央公論社、1990、p.39 から転載。

巻四末尾に描かれた便所は、穴を穿った上に2枚の板を渡しただけの簡単な構造であり、「きんかくし」は描かれていない。また、詞書の内容とも一致しない描写となっている。同様な構造の汲取便所の事例として『弘願本法然聖人絵』¹⁵⁾第二巻に描かれた法然が便所でしゃがんでいる絵（図6参照）もよく使われる。



上人かは屋にて御念佛ありけるを ある
御弟子いさめ申けれハ
不浄にて申念佛のとかあらは
めしこめよかし弥陀の浄土へ

図6 『弘願本法然聖人絵』に描かれた「廁念仏」の絵とそれに付けられた詞

注：本稿では、仏教大学所蔵の複製本から転載

有名なのは『法然上人絵伝』（国宝、知恩院所蔵、48巻）¹⁶⁾である。この知恩院所蔵48巻本『法然上人絵伝』は、浄土宗の開祖・法然の生涯を描いた絵巻物である。一方、複製本としても刊行された『弘願本法然聖人絵』は、まったく違う法然上人の故事を描いた絵巻である。初めに詞書を出して、その次にその内容を絵画的に表現した絵を置く手法で描かれている。大きな特徴として法然の法語が多数登場することである。上記の「廁念仏」に関する法語とそれを描いた図（図6参照）は、法然上人の遺文集や伝記類にも見ることができない法語であるとされている¹⁷⁾。

鎌倉時代後期に描かれた『弘願本法然聖人絵』に描かれた「厠念仏」についてみていく。中世の便所を研究する先行研究では、ほぼすべてにおいて言及される有名な絵である。そこには明瞭に「きんかくし」が描かれており、「かはや」を描いた建物もなかなか立派な建物である。この建物には廊下が廻されており、その一隅に便所があり、扉も立派な板構造になっている。右手に、衣を掛けるための竿が渡され、法然は衣を脱いでそれに掛けてから、高下駄を履き扉側に向いてしゃがんでいる。

描かれた「きんかくし」は扉側に取り付けてあり、扉は外開きになっている。「きんかくし」は一枚板で上部が楕円形に隅がカーブしている。つまり、単なる板を取り付けたものではないことがわかる。法然はしゃがんだ姿勢で、肌着を「きんかくし」に掛けてはいない。このことによって、「きんかくし」は便所にしゃがんだ際に衣を「掛ける」ためのものではなく、単に小便除けのために付けた板であり、この板に掴まったりするものでもない。また、床下がどのような構造になっていたのかをうかがうことはできない。そのため、この絵をもって汲取便所を描いているとは論じることはできない¹⁸⁾。

この『弘願本法然聖人絵』に描かれた「厠念仏」の絵は、描かれた「きんかくし」に関して最も古い時期のものである。

次に便所を描いた絵を指摘できるものに『洛中洛外図屏風』がある。『洛中洛外図屏風』とは、16世紀、室町時代の終わりごろの京都とその周辺を描いた屏風絵である。江戸時代前期のものを中心に、約100点現存している。そのなかで景観が室町時代に遡れる作品は4点だけである。①歴博甲本（町田本、三条家本）、②上杉本（米沢市上杉博物館蔵）、③歴博乙本、④東博模本（東京国立博物館蔵）である。そのなかで最も有名なのは、豪華絢爛な②上杉本である。これら4点の制作年代、制作者、発注者に関する研究成果を表にまとめると次のようになる。

表1 ①から④までの制作年代・制作者・発注者表

名 称	制作年代	制作者	発注者
歴博甲本	1506	狩野元信	細川高国
東博模本	1540年代前半	狩野元信周辺	細川元晴周辺
上杉本	1565	狩野永徳	足利義輝（上杉謙信宛）
歴博乙本	1580年代頃	狩野松栄・宗秀周辺	？（不明）

これら室町時代に制作された「洛中洛外図屏風」のなかで、「便所」が描かれているのは、①歴博甲本だけである。この歴博甲本には4カ所に「便所」が描かれている（図7～図10参照）¹⁹⁾。



図7 ウラに描かれた便所1

便所は、ウラ（オモテの反対側）に描かれている。わら藁葺き屋根。

注：『洛中洛外図大観』p.14から転載

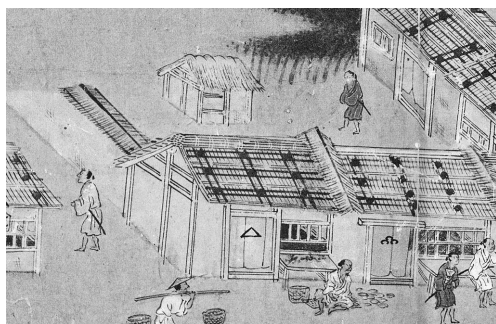


図8 ウラに描かれた便所2

屋根はわら藁葺き、二間二間の構造 内部構造は不明。

注：『洛中洛外図大観』p.21から転載

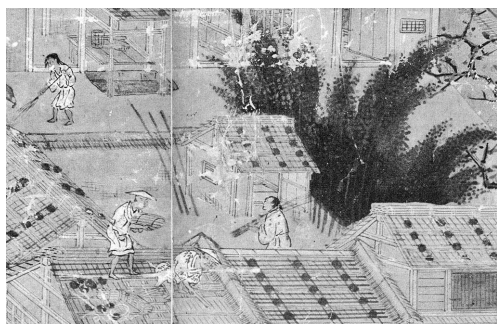


図9 ウラに描かれた便所3（共同便所か）

オモテの家並みと同じく、板葺き石敷きの屋根。ウラに描がかれた共同便所か。

注：『洛中洛外図大観』pp.58・59から転載

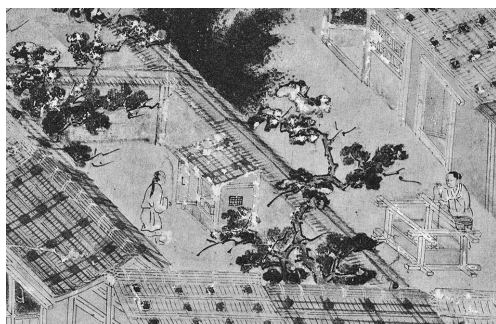


図10 ウラに描かれた便所4

ウラに築地に接して描かれた共同便所。板葺き石敷き屋根内部は、2枚の板を渡し入り口に向かって、「きんかくし」が描かれている。

注：『洛中洛外図大観』p.69から転載

歴博甲本²⁰⁾は六曲一双の屏風で、長く三条家に伝来、その後、町田家が購入、東京国立博物館の所蔵を経て最終的に国立歴史民俗博物館の所蔵となった。現存する洛中洛外図のなかでは最古のもので16世紀前半の作品と考えられている。

歴博甲本に描かれた便所のうちの1つに「きんかくし」が描かれている（図10参照）。それを見ると床は一段高くなっており、扉が開いている。今まさにひとりの女性が便所に入ろうとしているかのように描かれ、開いた扉の側に「きんかくし」が描かれている。つまり、用を足す際は、入り口扉の側に前を向いてしゃがむ構造になっていることがわかる²¹⁾。扉は便所の建物の中央部分から開いているように見え、隣にもう1つ便所が設えられていたとも考えられる。

歴博甲本に描かれた便所4か所のうち「きんかくし」が描かれた便所は1か所だけである。京都の町屋の「ウラ」に設置された便所には、常に「きんかくし」が付けられていたわけではないこともうかがわれる。

次に江戸期に描かれた様々な絵入り本などに描かれた便所について検討していく。様々な浮世絵

や風俗画・挿絵などから便所が描かれたものを抽出することは至難の業である。そこで、本稿では江戸庶民風俗研究家である花咲一男²²⁾、渡辺信一郎²³⁾、永井義男²⁴⁾がそれぞれの著書のなかで挿絵として挿入した図版から江戸期の便所について考えていく。

花咲は、『酉のおとし話』（1777〈安永6〉年開版）のなかに描かれた二連式の共同便所の図²⁵⁾（図11参照）を引用している。日本橋本町通りの小路に描かれた共同便所の構造は、喜田川守貞が1837（天保8）年に筆を起し、30年間かけて書き上げ1854（嘉永7）年に完成した近世風俗史の基本文献『守貞漫考』（別称「近世風俗志」）に「厠」及び「江戸惣ごうか図」として解説している²⁶⁾ように、床の踏み板の一部がない構造になっている。そして、両方とも「きんかくし」は描かれていない。



図11 『酉のおとし話』に描かれた共同便所
注：『江戸かわや図絵』p.28の挿絵を転載



図12 『地口絵手本』に描かれた便所
注：『江戸かわや図絵』p.111の挿絵を転載

同じく花咲が『地口絵手本』から引用した便所²⁷⁾（図12参照）でも、「きんかくし」は描かれていない。

渡辺信一郎が『江戸の女たちのトイレ』のなかで挿絵として利用している歌川国貞²⁸⁾による『艶色秋之七種』に描かれた惣後架（図13参照）にも「きんかくし」は描かれていない。



図 13 惣後架を使用する女
注：『江戸の女たちのトイレ』 p.29 の挿絵を転載



図 14 遊女が遊廓の便所で小用を足す
注：『江戸の糞尿学』 p.99 の挿絵を転載



図 15 便所で小用をする女にからむ男
注：『江戸の糞尿学』 p.112 の扉絵を転載

同じく同書で引用する『柳樽余興末摘花』（嘉永4年作）に描かれた「下女が使用中の惣後架」と題した挿絵でも「きんかくし」は描かれていない。『守貞漫考』のなかで喜田川守貞が指摘しているように、江戸の惣後架の扉は下半分だけの扉である。挿絵では扉を開けたまま用を足しているが普通は閉めて用を足した。

一方、遊廓の一シーンを描く構図のなかに便所での場面を描いたものに「きんかくし」が描かれている。永井義男『江戸の糞尿学』の挿絵のなかに、歌川国貞が描いた『百鬼夜行』（文政期作）に遊女が遊廓の一階にある便所を使用している様（図14参照）を描いたものがある。遊女が使用している便所には「きんかくし」が描かれている。また、歌川国芳の『花結色陰吉』のなかで便所で男女がからむ様を描いたもの（図15参照）にも「きんかくし」が描かれている。遊廓や町屋でも裕福な商家の家に設けられた便所には「きんかくし」が付けられていたようである。

3. 発掘された「きんかくし」

考古学上の成果として「便所」も遺跡のなかからいくつか発見されている。本節では、このような遺構に残された便所と「きんかくし」について考察していく。

考古学上の成果として「便所」が確認され始めたのは藤原京遺跡において「便所」遺構が発見²⁹⁾されて以来である。その後、「便所」の存在が推測され従来の遺構の想定が覆るなど「便所」遺構発見の意味は大きい。

そうしたなかで、「きんかくし」が発見されたのは、中世後期の朝倉氏の居城であった越前一乗谷遺跡から出土した事例が最も古いものに属している。越前一乗谷は、越前一国を支配した戦国大名朝倉氏の本拠地として家臣の屋敷も集住した、まさに朝倉氏の城下町でもあった。1573（天正元）年朝倉義景が織田信長に敗れた後、織田の家臣・柴田勝家が町全体を北の庄に移すといつか田園地帯に戻り、そのまま歴史から埋もれていた。近年、戦国期の城下町遺構として脚光を浴びるようになる³⁰⁾。

越前一乗谷遺跡において発見された「便所」及び「きんかくし」については、黒崎直が研究代表者をつとめた科学研究費助成金（基盤研究 A：トイレ遺構の総合的研究）の報告書『トイレ遺構の総合的研究－発掘された古代・中世トイレ遺構の検討－』³¹⁾で古代・中世の便所遺構について俯瞰できる。このなかで水野和雄が「朝倉遺跡のトイレ」として概要をまとめている³²⁾。それによると、「『金隠し』は杉板で、長さ 31.5 cm、幅 22.2 cm、厚さ 1.9 cm。上部両隅を面取りし、下半分は便所床下に埋め込むため両側を幅 4 cm ずつ切り込んでいる」（図 17 参照）と説明している。図を見ると、上部より便所に埋め込まれた部分の方が長い。



図 16 一乗谷遺跡に点在する便所

注：前掲注 2）p.59 の図を転載



図 17 発見された「きんかくし」

注：前掲注 2）p.60 に掲載する写真を転載

上述の『弘願本法然聖人絵』に描かれた便所にみえる「きんかくし」や歴博甲本に描かれた便所のひとつに描かれた「きんかくし」と同じように、左右の隅が面取りしてある遺物が出土したことになる。左右の隅が面取りしてあると、衣類を掛けても垂れ下がる恐れがある構造になっている。そう考えると、「衣掛け」が訛って「きんかくし」になるという俗説は成立しがたいことになる。そして、描かれた便所に設えられた「きんかくし」が入り口扉側に付けてあることから、入ってしゃがむ姿勢は、入り口扉側に向かってしゃがんでいたことになる。

次に「きんかくし」と思われる遺物が発掘された事例に、吉川元春館跡の便所から発見されたものがある。毛利元就次男元春は、小早川隆景とともに「毛利両川」と呼ばれ毛利氏の中国平定を中心人物であった。広島県山県郡豊平町にあった元春の居館は、秀吉の中国攻めの時期から関ヶ原の戦いで豊臣氏側が敗れる時期まで営まれた。ここから、土坑に木製桶を埋めた便所（図 18 参照）や篝火や木製品が出土している。そのなかに、「きんかくし」の一部（図 19 参照）が出土している³³⁾。



図 18 埋桶がある便所遺構

注：前掲注 2) p.74 の写真を転載



図 19 入隅がある「きんかくし」

注：前掲注 2) p.76 の写真を転載

図 18 は、ひょっとすると吉川元春も使用したかもしれない便所の下、土中に木製の桶が埋め込まれている様子がよくわかる。まさに糞便を貯留するために埋めた桶が出土したことになる。大きな甕を埋めるより安価であったことが木製の桶の使用に繋がったと考えている。

その他、豊臣秀吉による朝鮮出兵の際に北九州に出兵のための拠点として設営された名護屋城の木村重隆陣屋跡から出土した「きんかくし」は、三角形の板石を逆さに貼り付けた状態で出土した（図 20 参照）珍しい事例である。これは、茶道における「砂雪隠」と同じような設えとされている³⁴⁾。



図 20 板石で作られた「きんかくし」

注：前掲注 2 掲載の写真 p.77 を転載

1995（平成 7）年、日本最初の鉄道拠点となった新橋駅が作られ後に汐留貨物駅になり貨物駅として使用された国鉄汐留駅跡が、再開発にともなって発掘調査がなされた。その結果、旧新橋駅の遺構や江戸時代の仙台藩上屋敷跡の遺跡が発掘された。仙台藩伊達家上屋敷及び龍野藩脇坂家上屋敷跡から、「きんかくし」（図 21・図 22・図 23 参照）が出土している。



図 21 脇坂家から出土した「きんかくし」



図 22・23 伊達家から出土した「きんかくし」2 例



注：図 21～図 23 までの 3 例は、前掲注 2）に掲載する写真 p.90 及び p.91 の写真を転載

これら 3 つの事例は、江戸にあった諸藩の屋敷内の便所に備え付けられた「きんかくし」であるが、いずれも入隅の構造になっている。

以上の発掘事例から推測できることは、武家屋敷の便所には隅入を施した「きんかくし」が付けられていたと考えられる。

東京赤坂溜池につらなる谷に溜池遺跡がある。現在は隣接して衆議院議員会館が建っている。江戸時代には二本松藩出羽家の上屋敷とその西側に谷を挟んで日吉山王社があった。湿地地形であっ

たため多くの木製品が出土している。社家屋敷地の一角から便所遺構が発見された（図 24 参照）。便所は 2 室に仕切られ、一室には大きな木の切株を削り貫いた手水鉢が置かれていた。大便所の前室として使用されたようである。もう一室は、入り口をすべて覆う開き戸が取り付けられ、床板には長方形の穴が穿たれ、周囲に^{かまち}框が回され、一端に「きんかくし」が取り付けられていた。復元した遺構が図 25 である³⁵⁾。



図 24 便所の出土状況

注：注 35)『発掘された日本列島 97' 新発見考古学速報』、p.65 の写真を転載



図 25 復元された便所遺構

注：注 35)『発掘された日本列島 97' 新発見考古学速報』、p.65 の写真を転載

興味深いのは、有名な曲亭馬琴が日々書き続けた日記の一部（多くは関東大震災で焼失）、『文政十年丁亥日記』に次のような一節がある。

一今日、大工忠八、客雪隠の壺入かえ、元のごとくとち付ケ、今一ツの雪隠キンかくしわく新規作之、終日也、(後略)³⁶⁾

馬琴の自宅の便所に「キンかくしわく」を「新規」に取り付けた記事である。江戸時代後期には、既に大便所に「きんかくし」が取り付けられており、その大便所の開口部に枠として「框」が取り付けられる場合もあったことがわかる。

4. 近代の陶器製大便器と「きんかくし」

明治期になると、一般家屋にも「框」を施し「きんかくし」を付けた構造の大便所が一般的であったことが、エドワード・S・モース（1838-1925）の『日本のすまい－内と外－』からもうかがえる。モースは、1877 年・1878 年、1882・1883 年と 3 回来日し日本で最初の貝塚（大森貝塚）を発掘調査した。1877 年に創設された文部省所管官立東京大学で教授を務め、日本各地を調査し膨大な民俗資料を蒐集するなどした。彼が書いた日記『日本その日その日』が有名である。そして、早い時期に『Japanese Homes and Their Surroundings』（『日本のすまい・内と外』）を出版している。この『日本のすまい・内と外』のなかで、日本家屋の和式便所のスケッチを挿絵として紹介している（図 26・図 27 参照）³⁷⁾。



図 26 『日本のすまい－内と外－』に挿絵として提示された「きんかくし」のある便所

注：前掲注 37) p.222 の挿絵を転載

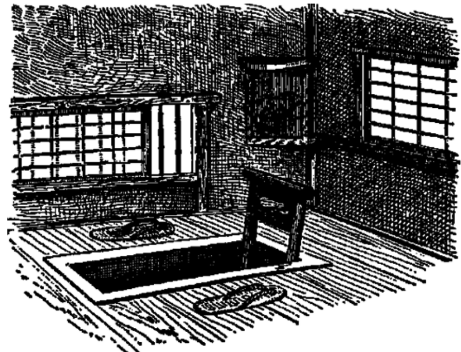


図 27 『日本のすまい－内と外－』に挿絵として提示された「きんかくし」のある便所

注：前掲注 37) p.224 の挿絵を転載

モースが図版として提示した「きんかくし」のある便所のうち、図 27 は、鳥居形の下部が開いた状態のまさに鳥居形そのものの「きんかくし」である。これなど、小便が前に飛び出し床を汚すのを防ぐ構造にはなっていない。現在のおまると同じように、しゃがんだ姿勢で手を「きんかくし」の鳥居形に添えるために設置されたようにも見える。

また、床に大便所用の下駄や草履が描かれている。それを見ると、「きんかくし」に向かって前を向いてしゃがむのが通常の使い方であったことがわかる。

モースは、『日本のすまい－内と外－』の「便所」の項で次のように書いている。

便所は、日本の家のなかでも、職人がとくに気をくばるところであるが、じっさいには、あまり目だたない。おそらく、人の目にとまらないところであるためであろう。建物のなかでは、便所が不快の元凶とされ、とくに公共の建物では、なおさらそうである。しかし、日本の上流階層の家では、アメリカの大都市の豪邸にあるような、不快さや危険性はない。いなかの便所は、たいてい、ちいさな箱のような形をしており、主家からはなれてたつ。その出入口は開き戸である。都会の上流階層の家では、住宅のすみにあり、たいていは縁側のはしにある³⁸⁾。

都会以外の日本の住宅には粗末な便所が多かったこと。「都会の上流階層の家」では、便所に気を配った設えをしていることを書いている。その一端が大便器の「きんかくし」であった。

江戸時代末期から明治初期、瀬戸（愛知）・常滑（愛知）・信楽（滋賀）・赤坂（福岡）などで陶器製便器を作り始める。しかし、高価で一般家庭では設えは無理であった。もっぱら江戸期と同じく木製便器が使用されていた³⁹⁾。この状況が劇的に変化するのは、1891（明治 24）年に発生した巨大地震＝濃尾地震⁴⁰⁾が契機となった。この地震が直下型地震であったため、全・半壊家屋 22 万棟以上という大きな被害が発生した。この濃尾地震復興過程で、一挙に陶器製便器が一般家庭に普及していく。

各地の陶磁器生産地で製造された便器は、当初、陶器製便器であった。瀬戸地方では「せとも

の」として知られる陶器を“本業”と呼び、「せともの」を製造する本業窯⁴¹⁾で陶器質の便器が焼かれていた。いわゆる本業便器である。欠点は素地の吸水性が高く、しかも表面に貫入（釉薬の表面にできたひび）が多かった。特に染付便器（図 28 参照）は高価で一般庶民には手がでなかった⁴²⁾。

19 世紀末、素地の吸水性を防ぎ貫入を防止する磁器質の丸窯便器が考案される。前田祐子はその著書『水洗トイレの産業史－20 世紀日本の見えざるイノベーション－』のなかで、次のように書いている。

磁器質の丸窯便器がやはり 1891 年頃、川本英雄によって考案された。従来の角型便器の改良を目指し、ハネ止めおよび前面の視野をさえぎる方法として金隠しをつけた小判型のもので、現在の和風便器とはほぼ同様の形であり、その原形ともいわれる。この便器は石膏型を利用した手起こしで成形した。（中略）やはり豪華な染付（後に青磁釉）を施した高価なものであった。⁴³⁾

磁器によって瀬戸で製造された磁器製便器は、丸窯便器と呼ばれた。石膏型で型起こしをし、焼成時にも歪みが少ない利点があった。この丸窯大便器の前部に付けられていた板状の「きんかくし」を川本英雄が小判形に成形した大便器を考案した。これが現在まで続く大便器の基本形態となった（図 29 参照）。

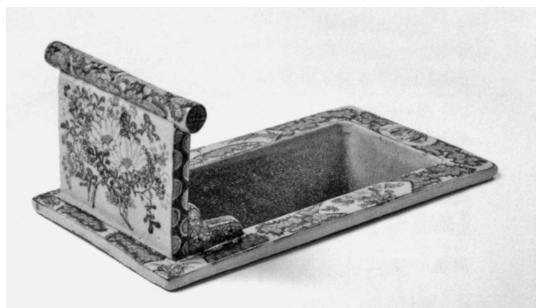


図 28 角形大便器（明治後期の作）

注：入澤企画制作事務所編『染付古便器の粹－清らかさの考察－』（INAX 出版、2007）p.53 図 6 を転載。

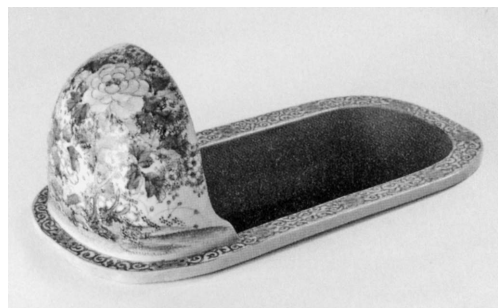
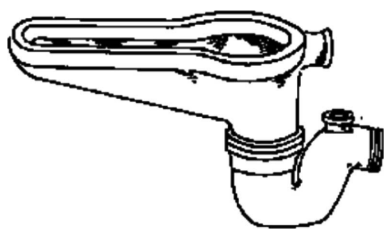


図 29 小判形大便器（明治後期の作）

注：入澤企画制作事務所編『染付古便器の粹－清らかさの考察－』（INAX 出版、2007）p.59 図 17 を転載

しゃがんで用をたす和式水洗式大便器の嚙矢は、1902（明治 35）年に須賀商會が輸入した洋式便器（水洗式）を住友男爵邸に設置した事例である。須賀商會は、イギリスの便器メーカー、トワイホード会社及びジョンソン会社からイースタン・ウォータークロセット（印度便器）（図 30 参照）を輸入し、住友家の便所の床の中に埋め、上部を床の面と並行になるようにし、ご丁寧に大理石で「きんかくし」を別注で作り水洗式大便器の前部に取り付けた⁴⁴⁾。



印度便器

図 30 瓢箪型大便器

注：注 44)『建築科学 便所の研究』の挿絵から転載。
p.244。



鉛製水洗便器

図 31 和式大便器に鉛製の底を付けた水洗式大便器

注：注 44)『建築科学 便所の研究』の挿絵から転載。
P.255。

その後、様々な工夫がされて、水道屋が和式大便器の下部に鉛製の底を付けた水洗式和式便器が登場する（1902 年頃）（図 31 参照）。

このようにして磁器製和式大便器が日本中の家屋に流布するには、工業製品として安価でしかも大量に製造され販売される必要があった。その歴史の変遷をたどってみる。

1912（明治 45）年、名古屋の日本陶器合名会社が製陶研究所を設立し、翌 1913（大正 2）年和式水洗トイレの市販を開始した。1917（大正 6）年になると衛生陶器部門を分離し、東洋陶器株式会社を設立する。これが現在の TOTO（株）になる。一方、日本陶器合名会社は、日本陶器（株）の時期を経て、現在はノリタケカンパニーリミテドになる。

名古屋製陶所が 1933（昭和 8）年頃に発行したカタログをみると、この時期既に磁器製の大便器では、前部に「きんかくし」が一体として付いている和式水洗トイレが販売されていることがわかる（図 32～図 34 参照）。

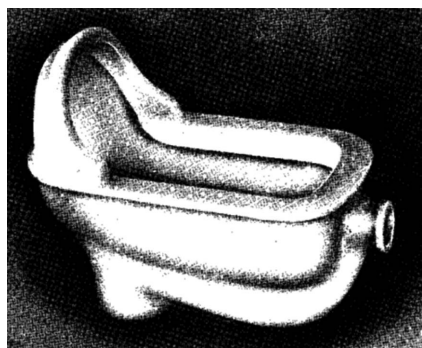


図 32 和式水洗トイレのデッサン

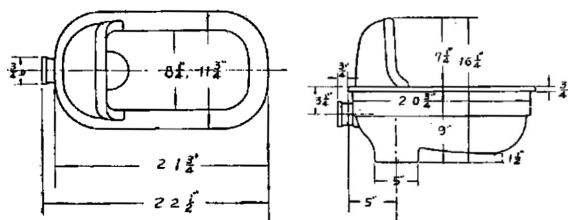


図 33 商品としてのサイズを提示

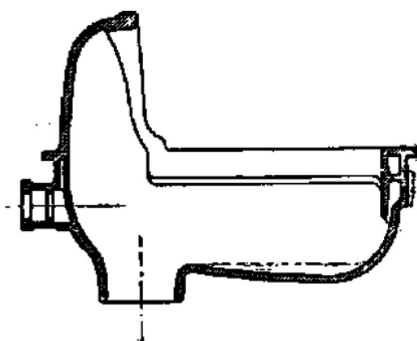


図 34 断面図

注：図 32～図 34 は、名古屋製陶所発行の『衛生陶器設計用型録』（筆者所蔵）から転載

おわりに～「きんかくし」についての憶説～

以上、本稿では、日本の大便所に取り付けられてきた「きんかくし」についてみてきた。まとめると、以下ようになる。

- ①日本人は、「きんかくし（金〔鞆とも書いた事例もある〕隠しと書く事例も）」を付けた和式大便器を、遅くとも南北朝期（14 世紀半ばから約 50 年間を指す）には使用していた。
- ②「きんかくし」を付けた和式大便器は、身分の高い階層の住宅に設えられた。
- ③江戸時代になると、描かれた事例や発掘事例から、遊郭や武家屋敷の便所には「きんかくし」を取り付けるのが一般的であったようである。しかし、一般庶民の家屋、特に都市にあった長屋の惣後架や都会以外の農家などの外便所には「きんかくし」は付けられていなかった。
- ④次第に、一般家屋にも「きんかくし」を付けた大便器が普及していった。
- ⑤明治期以降になると、陶器質和式大便器が作られるようになる。陶器質和式大便器に続いて、それを改良した磁器質和式大便器にも、当然のように「きんかくし」が下箱（げはこ）と一体となった構造になっていた。
- ⑥濃尾地震以降、「きんかくし」を前部に持つ磁器質和式大便器が流布していく。
- ⑦20 世紀にはいると、日本にも水洗式トイレが輸入されるが、その水洗式トイレにも「きんかくし」を付ける工夫がされたように、以降、工業製品として販売されるようになる水洗式和式大便器にも「きんかくし」は当然のように付いていく。

現在まで水洗式和式大便器にもほぼすべて「きんかくし」は付いている。これほどまでに「きんかくし」を偏愛する民族性は驚く以外にない。世界中で使用されている和式大便器と同じような構造の大便器には、ほぼまったく「きんかくし」は付いていない⁴⁵⁾。

最後に、本稿で使用してきた用語としての「きんかくし」について考えてみたい。

桜川貞雄は、その著書『トイレ考現』⁴⁶⁾のなかで、次のように書いている。少し長いが引用したい。

わが国のしゃがみ式便所は床に幅 22 cm 長さ 47 cm 前後の長方形または小判形の穴をあけ、下に便つば（げすがめ）をおいたもので、穴にはきんかくし（前立）というものが普通につけてある。このきんかくしの効用についてはいろんな珍説、異説があり、有用論、無用論が花を咲かせているので今その 1 部をあげて見よう。

小便特に女性の場合に前に飛散らないために必要だという説は中々有力である。しかし印度など南方の便器には付いていないからあちらの女の人の飛ばないのか、また昔の樋箱（貴族用のおまる）にも前に鳥居のようなものが付いているが柱だけで壁がないからどうもその目的ではないらしく、これは衣服を掛けて前を隠すものだと聞いており、飛び散ったのでは衣服をぬらしてしまう。力むための握り棒だという人もいる。子供用のおまるにはそれらしい握りがよくついている。子供がこのきんかくしをよく抱えているのを見かけるがこれは不安定で恐ろしいから、すがりつくためであろう。（中略）昔某紡績工場の便器として、きんかくしの内部が平面では小便がはね返って困るから分水れいのような山をこれにつけてくれないかと頼まれて、そういう便器を作ったことがあったが、その効果についてはついに確かめる機会がなかった。アメリカの便器の型録にも便器の前縁を 3 cm 幅 2 cm ほど高くしたものがあり、はっきり婦人用と断ってあるところを見ると、女性用としては一概にきんかくしは無用だとも片付けられない。

きんかくしの言葉通りの意味で、入浴のとき手ぬぐいを前に当てるように前を隠すのが目的だという説は最も無難なものだが、それは日本人的感情でそんなものなら無用だという説も生まれてくる。長方形の穴では前後が不明で困るから潜在的方向指示具だという人もいる。トイレット部長の藤島氏はそんな「感じ」のものなら不用だと、駄便器では思い切ってこれを取ったが、あとから前後がわからなくて困るという声が案外に大きいのでとうとう前立てを別に造り納めることになった。⁴⁷⁾（下線：筆者注）

桜川の記述のなかで、「きんかくし」を「前立」または「前立て」と書いている。桜川が「きんかくし」の効用を検討するなかで、女性が小用をする際に効用があることを書いているが、女性にも効用がある和式大便器の前部の突起を「きんかくし」と称するのは、あまりにも不都合であろう。

このような思いは、江戸時代の庶民も感じていたようで、花咲は、『川柳評万句合』（古川柳研究会孔版本）の宝暦 11 年桜印 2 枚目の川柳を引用している。

○きんかくし女中は何をかくすやら

花咲は、この句について次のような解説を付けて紹介している。

小便の方ではなく、大使用の雪隠の丁度しゃがんだ前の小便がえしの板を、俗に「きんかくし」という。この板は、ほとぼしる放尿を四方に散らぬように防ぎ、壺中におちるように設計

されたものであるが、同時に、前陰部をかくす目的も持たされていて、名称のきんかくしは、きん丸かくしの意味であろうが、この名称では女性にはふさわしくない、と江戸人も考えたらしい。⁴⁸⁾

かつて、筆者は日本トイレ協会⁴⁹⁾にこの「きんかくし」について、工業製品上の名称を照会したことがある。日本トイレ協会に集う会員には、衛生陶器製造に長年関わった会員も多いからである。しかし、結果は、正確な名称にについて満足がいく回答はなかった。

そこで、北九州市にある TOTO ミュージアムの学芸員の方に相談をしてみた。結果、やはり不明とのことであったが、工業製品名に「きんかくし」では、あまりに不釣り合いなのではという筆者の疑問に共鳴された学芸員の方がわざわざ工場のしかるべき方に問い合わせをいただいた。結果として、TOTO 株式会社では、工業製品上の名称としては「前立て」であると回答をもらった。

まさに、「東陶通信 100 号記念出版」として東洋陶器株式会社が出版した桜川の『トイレ考現』のなかで 1930 年から長年東洋陶器株式会社に衛生陶器一筋に勤められた桜川（取締役技術部長、参与を歴任）が、当然のようにさらっと「きんかくし」（前立）と書かれている文章に接して、TOTO 株式会社では、和式大便器の前部の突起部を前立（前立て）と呼称してきたことが判明した。

しかし、ことはこれで氷解したわけではなかった。古書肆で衛生便器のカatalogを購入したなかに、戦前に発行された『衛生陶器設計用型録』（名古屋製陶所発行）⁵⁰⁾の「和式大便器之部」に「和式大便器ノ特徴」と題して名古屋製陶所の和式大便器の特徴を説明した文章に、次のような一文があった。

本品ハ本来此種ノ洗滌式大便器ニ於イテ糞便収容室ノ底部著シク広大ニシテ大量ノ貯留水ヲ殘存スルト共ニ用便ノ都度全面ノ清掃ニ大量ノ放水ヲスルノ不経済ト貯留水ノ為ニ生ズル跳返リトノ欠点ヲ除去セントスル目的ニヨリ上体ニ庇状突縁ヲ付シテ下方ノ貯水道ヨリ送奔スル跳返リヲ防止シ・・・（波線：筆者注）

と説明し、「きんかくし」部分を「上体ニ庇状突縁」と表現しているのである。

ほぼ同時期に発行された同社のカタログ『名陶衛生陶器設計用図面』⁵¹⁾の「品質白色硬質陶器製」の「特徴品ノ紹介」にも、「品番 C.21 和式大便器ノ特徴（婦人用又ハ一般用）」として、上記と同じ説明文がある。

貯留水ノ為ニ生ズル跳返リトノ欠点ヲ除去セントスル目的ニヨリ上体ニ庇状突縁ヲ付シテ下方ノ貯水道ヨリ送奔スル跳リヲ防止シ・・・

現在婦人用ノ大便器ニ対シ余リ顧ミナイ結果一般用ヲ混用スル為メニ放尿ノ場合跳返シノ嫌イアリシモ本品ハ特ニ此ノ点留意構成シタル便器ナルガ故ニ女学校又ハ婦人ノ会合場所等ノ衛生

施設ニハ理想的構造ヲ有ス（波線：筆者注）

桜川が指摘した女性の小用の際の跳ね返り防止を「きんかくし」部分の周縁部に工夫をした和式大便器は女性用大便器として最適であると宣伝している。ここでも、「上体」と表現し、当時一般的な俗称であったであろう「きんかくし」の呼称は使用していない。

現在までのところ、和式大便器の前部の突起部についての衛生陶器製造関係者が記載した名称としては、桜川が使用している「前立（前立て）」以外には見いだしていない。しかし、1930年代の工業製品カタログには「上体」と呼称していたものも存在していたことがわかる。そのため、TOTO（株）の製品部位呼称である「前立（前立て）」が一般的・正式な呼称であるとするにも躊躇を覚える。

子ども向けの本である『トイレの自由研究 1 おしりを洗う習慣ができた！～起源・歴史・技術変遷編～』でも、様々な説があることを紹介しながら、「前立て」をさりと正式の呼称として使っている⁵²⁾。

今は解散した INAX が関係した出版物『染付古便器の粹－清らかさの考察－』⁵³⁾に所載の鶴岡真弓（執筆当時、多摩美術大学教授）の論文では、明治後期に出現する染付大便器について次のように書いている。

（前略）瀬戸の地から急速に広まった陶磁器製便器は、ぜいたくにも手描きや版による染付の装飾が施された。（中略）

その例は枚挙に暇がないほどだが、具体的にいくつかの瀬戸一般陶磁器と、当時の小判形大便器の文様を比較してみよう。六代加藤紋右衛門製と同定できる「染付花鳥図花瓶」のおおらかな「牡丹」では、小判形大便器の金隠しにそのまま写されたかたちで表されている。⁵⁴⁾（下線：筆者注）

同じ本のなかで、服部文孝（執筆当時、瀬戸市美術館学芸員）も「染付古便器の歴史」と題する論文のなかで、次のように述べている。

（前略）瀬戸においては長い歴史をもっているのが陶器であったことから、本業と呼び、陶器製の便器を「本業便器」と呼んだ。

最初の本業便器は、木製便器の形状を模した角形大便器（下箱^{げはこ}）、朝顔形小便器（上戸^{じょうこ}）が主流で、^{あめゆう}鉛釉やうのふ釉が施されたものであったとされる（後略）。

そして、明治二四年におきた濃尾大震災の結果、富裕層や旅館などの復旧家屋用として本業便器が購入されていき、急激に本業便器の需要が大きくなった。

当時、瀬戸で便器を作っていたのは、北新谷の「湯の根^{ゆね}」地区の本業窯であったが、濃尾大震災前後頃から、金隠しの内外に手描^{てがき}染付による花鳥模様を描き、縁には祥瑞風の模様^{しょうずい}を施した下箱や上戸が制作されるようになった。（後略）⁵⁵⁾（下線：筆者注）

INAX ライブラリーミュージアム企画委員会が企画した当該著書のなかで、鶴岡も服部も「金隠し」と書いているのである。もはや製陶会社としては解散した INAX（前身は、1924 年設立の伊奈製陶株式会社。2011 年解散し株式会社 LIXIL になる）では、和式大便器の前部分に付属する箇所をどのように呼称していたのかは探るべきがない。

最後に、筆者の臆説を。

「きんかくし」が日本史上に登場するのは、どうも南北朝期くらいからのようである。つまり武士の世の中になった時期に「きんかくし」と俗称される和式大便器の前部に板が取り付けられる。しかも、当初から隅入などの装飾が施されているものが。そこには、しゃがむ姿勢で用を足す様と武士が甲冑を身に着けて床几に着座した際、腰から下部を守るための「草摺」が前腰部分にあるのと同様とよく似ている。その「草摺」と同じように、便所にじゃがんだ姿勢の前にある板を、「草摺」の俗称である「きんかくし」と呼ぶようになったのではなかろうか。しかし、まだ論証すべき資料を得ていない臆説の状態である。

注

- 1) この時放映された『プラタモリ』は、後に映像写真と解説文をまじえた本として出版されている。NHK「プラタモリ」制作班監修『プラタモリ 6 松山 道後温泉 沖縄 熊本』KADOKAWA、2016。
- 2) 清水久男「古今東西トイレよもやま話」大田区立郷土博物館編『トイレの考古学』東京美術、1997 所収、p.126。初出は 1990 年 2 月～3 月に開催された上記郷土博物館の企画展「といれ考」の展示パネルの解説文に修正・加筆を加えたところ。
- 3) 山田幸一監修・谷直樹・遠州敦子著『物語 ものの建築史 便所のはなし』鹿島出版会、1986、P.6。
- 4) 李家正文「平安時代の御樋殿について」同著『住まいと厠』鹿島出版会、1983、p.126。
- 5) 新訂増補国史大系『延喜式』吉川弘文館、p.456。「大壺」に関する記載はない。
- 6) 『トイレ遺構の総合的研究』（平成 7 年～9 年科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成果報告 研究代表者 黒崎直）奈良国立文化財研究所、1998、所収。
- 7) 前掲注 6) 論文、p.258。
- 8) 前掲注 6) 論文、p.261。
- 9) 黒崎直『水洗トイレは古代にもあったートイレ考古学入門ー』吉川弘文館、2009。
- 10) 前掲注 9) 著、pp.95-97。
- 11) 増田繁夫『源氏物語と貴族社会』吉川弘文館、2002 所収。初出は『武庫川国文』56 号、2000. 12 で、タイトルは「近江君の『おほみ大壺とり』考ー大壺・虎子・樋・樋殿・急所ー」となっており、後に同著の『源氏物語と貴族社会』に所収する際、サブタイトル中の「急所」を削除しているが、本文はそのままである。
- 12) 岩波文庫本『今昔物語』脚注では、「漢字表記を期した欠字か。『樋洗ひ（ひすまし）』が担当するか。『樋洗』は便器を洗い清めるなどの仕事を務める使用人」と書いている（森正人校注『今昔物語 五』岩波書店、1996。p.395。）小学館版『今昔物語 4』（小学館、1976）では、「筥洗」と本文をしており、岩波書店本の「□」部分はない。
- 13) 『類聚雑要抄』は 12 世紀中頃に編纂された儀式に関する史料である。平安貴族邸宅における饗饌・家具調度・その敷設・五節の舞姫進上、調度の目録など、当時の貴族住宅における行事を知ることができる格好の史料である。『類聚雑要抄指図巻』は、1704（元禄 17）年に作成された『類聚雑要抄』を絵画化しようと試みた史料である。平安時代の生活文化をイメージとして理解することができる貴

重なる史料である。川本重雄・小泉和子によって『類聚雑要抄』と共に翻刻・影印出版された。しかも詳細な注釈が施されており非常に便利な本である。川本重雄・小泉和子編『類聚雑要抄指図巻』中央公論美術出版、1998。

- 14) 『慕婦絵詞』は、14世紀半ばに作成された絵巻であり、制作の意図などが明瞭なものでもある。従って中世の便所がどのようなものであったのかをイメージとして知ることができる格好の材料でもある。前掲注3)でも引用され、「汲取便所が普及しはじめた頃の建築構造が示されている」(p.11)としているが、2枚の板の下に穿たれた穴が糞便を貯留する構造であったかどうかは判然としない。トイレに関する事項を網羅した日本トイレ協会編『トイレ学大事典』柏書房、2015においても、森田英樹による「日本のトイレの歴史」が掲載され、汲取便所を描いたと推定している (p.28)。
- 15) 『法然聖人絵』(重要文化財、現存4巻。3巻は、堂本四郎家所蔵。残り1巻は知恩院所蔵。1985年大法輪閣・法然上人絵伝刊行会が『堂本家所蔵 重文 法然上人絵伝(弘願本全三巻)』として複製本を刊行。同じく1987年に大法輪閣・法然上人絵伝刊行会が『知恩院所蔵 重文 法然上人絵伝(弘願本第四)』として複製本を刊行。本稿では、仏教大学所蔵の複製本を閲覧・複写させてもらったものを基に論じている。
- 16) 続日本の絵巻物シリーズで全3冊(小松茂美編、中央公論社、1990)として簡単に見ることができる。
- 17) 『法然聖人絵』(複製本では「法然上人絵伝」と題されているが、内題には「法然聖人絵」とあり、藤堂恭俊は『法然聖人絵』と呼称している。藤堂は「厠念仏」の法語を含め詳細に検討を加えている。①藤堂恭俊『『法然聖人絵』に引用されている法然の詞について』『東山高校研究紀要』8号、1962.3。②同『『法然聖人絵』に関する諸問題-特に法然の詞を中心に-』『仏教文化研究』11号、1962.3。③同『各種法然上人伝に引用されている法然の詞-特に『伝法流通絵』・琳阿本』・弘願本』・古徳伝』をめぐって-』『仏教大学研究紀要』42・43号 1962.10。特に、②では「厠念仏」に関する法語について詳細な典故を博捜し考証している。また、大法輪閣複製本には、藤堂による詳細な解題「重文弘願本『法然上人絵伝』解題」及び「知恩院本『法然聖人絵』解題」があり便利である。
- 18) これら2つの絵巻に描かれた便所を論拠に、汲取便所を論じ、尿尿の肥料としての利用まで論を拡げた論文に、亀田純生『『厠の念仏』と肥料としての尿尿の利用の問題』『東京農工大学人間と社会』3、1992.4がある。
- 19) 本稿では、『洛中洛外図大観 町田家旧蔵』小学館、1987を参照し、以下のページに掲載されている一部を転載した。図7は p.14 から、図8は p.21 から、図9は pp.58・59 から、図10は p.69 から転載した。なお、同本に所載されている項目解説中に、川嶋将生が「日常生活 動植物 建築、名所(歴史)」と題して書いたなかで、6カ所に便所が描かれていると指摘している (p.141)。川嶋は、本稿に提示した4カ所以外に p.69 及び p.83 に描かれている建物を便所としているが、明確に便所と認識することができなかったので掲載していない。
- 20) 歴博甲本の概要を知るには、水藤真『歴博甲本 洛中洛外図屏風を読む』(歴博士ブックレット11) 歴史民俗博物館振興会、1999が便利である。また、瀬田勝哉「ウラにそそぐ眼-町田本『洛中洛外図』の都市観-」『洛中洛外(一)近世風俗図譜 第三巻』小学館、1983所収に、当時の京都として描かれた街並みの「ウラ」の描き方について考察しており、そのなかに「ウラ」に描かれた便所についても言及している。
- 21) 前掲注19)所収の「項目解説」のなかで、川嶋は「これらの内、もっとも形態がよく分かるのは左隻第四扇の小川通付近のもので、木製の便器が一つ描かれ、きんかくしも見られる」(p.141)と説明している。
- 22) 花咲一男『江戸かわや図絵』太平書屋、1978。のち、改訂増補版として『江戸厠百姿』三樹書房、2000がある。本稿では両方を参照した。
- 23) 渡辺信一郎『江戸の女たちのトイレ-絵図と川柳にみる排泄文化-』TOTO 出版、1993。及び同『江

- 戸のおトイレ』新潮社（新潮選書）、2002。本稿では両方を参照した。
- 24) 永井義男『江戸の糞尿学』作品社、2016。
 - 25) 前掲注 22) 花咲『江戸かわや図絵』p.28。同『江戸厠百姿』p.31 にも同じものが掲載されている。花咲は、「長屋居住民専用のものか、通行人のための設備かは明らかでない」（『江戸厠百姿』p.29）としている。
 - 26) 喜田川守貞・宇佐美美機校訂『近世風俗志』第一巻、岩波書店（岩波文庫）1996。pp.103・104。
 - 27) 前掲注 22) 花咲『江戸かわや図絵』p.111。同『江戸厠百姿』p.70 にも同じものが掲載されている。
 - 28) 歌川国貞は、江戸後期の浮世絵師。多くの作品があり艶本の挿絵も手がけている。林美一『江戸枕絵集成 歌川国貞』河出書房新社、1987。小林忠監修『浮世絵師列伝』平凡社（別冊太陽）2006. 1 に解説がある。
 - 29) 藤原京における便所遺構については、狩野久・木下正史『飛鳥藤原京』（『古代日本を発掘する』Ⅰ）、岩波書店、1985。『藤原京跡の便所遺構－右京七条一坊西北坪－』奈良国立文化財研究所、1992。黒崎直・松井章・金原正明「科学的に解明された古代宮都のトイレ」『月刊 文化財』350 号、1992. 11。松井章「講座 生活文化史 トイレの研究」『歴史と地理』478 号、1995 などがある。また、古代東北における蝦夷対策として 733（天平 5）年に創建された出羽柵（でわのき）に連なる秋田城でも便所遺構が発掘されている。秋田考古学協会『みちのく古代トイレ（便所）シンポー発掘されたトイレから歴史とロマンを求めて－』秋田考古学協会、1995 もある。その他、中国などの海外使節の宿泊施設であった鴻臚館からも便所が発掘されている。山崎純男「筑紫館（鴻臚館）の便所遺構」『月刊 文化財』350 号、1992. 11。長岡京跡や平泉、鎌倉時代の鎌倉若宮御所跡からも便所遺構が発掘されている。
 - 30) 小野正敏「越前一乗谷における町屋について」矢守一彦編『城下町の地域構造』（日本城郭史研究叢書 第 12 巻）名著出版、1987 所収。
 - 31) 奈良国立文化財研究所、1988。
 - 32) 『月刊 文化財』350 号にも、水野は「戦国時代城下町『一乗谷』のトイレ」と題して、紹介している。
 - 33) 広島県教育委員会中世遺跡調査班「中世の埋め桶、トイレと判明－広島県山県郡豊平町 吉川元春館跡－」『いぶき 中世のひろしま』11 号、1995。広島県教育委員会事務局教育部文化課編『吉川元春館跡－第 1 次発掘調査概要－』広島県教育委員会、1996。
 - 34) 鎮西町教育委員会「特別史跡 片桐且元陣跡 木村重隆陣跡」『鎮西町文化財調査報告書』111 集、1993。堀苑孝志「名護屋城の木村重隆陣屋跡で発見されたトイレ跡」『月刊 文化財』350 号、1992.11。
 - 35) 文化庁編『発掘された日本列島 97' 新発見考古学速報』朝日新聞社、1997。斉藤進「溜池遺跡の調査－衆議院議員会館整備等事業に伴う埋蔵文化財調査－」『江戸遺跡研究会会報』131 号、2012. 4。「特集 溜池遺跡に江戸・東京」『たまのよこやま』（東京都埋蔵文化財センター報）89 号、2012. 6。
 - 36) 柴田光彦新訂増補『曲亭馬琴日記 第一巻』中央公論新社、2009、p.120。
 - 37) エドワード・S・モース著 上田薫・加藤晃規・柳美代子共訳『日本のすまい－内と外－』鹿島出版、1979。
 - 38) 前掲注 37) p.222。
 - 39) 前田祐子『水洗トイレの産業史－20 世紀日本の見えざるイノベーション－』名古屋大学出版会、2008、pp.120・121。なお、前田裕子「日本における衛生陶器の工業化－水洗トイレの産業史－」『国民経済雑誌』188 巻 2 号、2003.8 も参考になる。岐阜市歴史博物館『博物館だより』66 号（2007.8）に、大正時代（1912 年～1926 年）に各務原市の旧柴山住宅離れの上便所で使われていた大便器の写真が載せられている。それを見ると、隅入がある「きんかくし」が付けてある大便器である。
 - 40) 1891（明治 24）年 10 月 28 日に濃尾地方で発生した巨大地震。M 8.4 と推定され日本史上最大の内陸

部で発生した直下型地震。死者は7千人以上、家屋被害は全壊家屋14万2千棟以上、半壊家屋8万棟以上という大きな被害を受けた。愛知県警察部『明治二十四年十月二十八日 震災記録』愛知県警察部、1892。村松郁栄『濃尾地震』（シリーズ日本の歴史災害 第3巻）古今書院、2006。岐阜新聞社出版局編『写真でみる濃尾地震－実態とその復興－』岐阜新聞社、1991など。

- 41) 本業窯と丸窯の区別、角形大便器など衛生陶器の歴史については、神谷高枝『衛生陶器五十五年－日本衛生陶器工業の歩み－』日本衛生陶器工業組合、1967が簡潔かつ的確な歴史を俯瞰させてくれる。ただし、発行が業界団体であったため、ほとんど流布していないことは残念である。神谷高枝は、「衛生陶器五十年史・メモ」も残している。（日本陶業新聞社青山武史所蔵のガリ版刷り資料）。この資料は、前田裕子氏から提供を受けた。期して謝意を表したい。濱田琢司「窯業地・瀬戸の伝統性とその評価－民芸運動の『産地語り』と瀬戸本業窯についての覚書－」『南山大学日本文化学科論集』18号、2018.3。
- 42) 服部文孝「染付古便器の歴史－瀬戸を中心として－」江別市セラミックアートセンター編『百花繚乱 染付便器の粹 トイレに見るやきもの文化－染付便器の民俗誌－』江別市セラミックアートセンター、2016所収。
- 43) 前掲注39) p.122。
- 44) 大泉博一郎『建築科学 便所の研究』土木雑誌社、1932。Pp.63・64。坪井礼三・西川弘三・桜川貞雄『衛生陶器』（最新工業材料叢書）常磐書房、1936、p.9。須賀藤五郎「本邦衛生工業の発達」建築知識社編『近世便所考』建築知識社、1937、p.244。にも同様の記述がある。
- 45) 韓国など朝鮮半島の大便器については調査が出来ていないのでなんとも言えないが、中国では「きんかくし」のある水洗式大便器も各地で実見することができた。しかし、「きんかくし」のないしゃがみ式大便器も多く存在していた。つまり混在している状況のようである。筆者など、ここに日本の影響を見る思いが強いのだが、今だ確たる定見を持つに至っていない。
- 46) 東洋陶器株式会社、1966。
- 47) 前掲注46)、pp.36・37。
- 48) 前掲注22)『江戸かわや図絵』p.47。
- 49) トイレをテーマに様々な観点からアプローチする建築家、デザイナー、行政職員、研究者、企業家が集う一般社団法人。1985年設立。現在も多様なテーマでトイレ環境に取り組んでいる。
- 50) 株式会社名古屋製陶所、1933発行。
- 51) 株式会社名古屋製陶所、戦前発行（発行年不載、1930年代中頃か）。前田裕子『水洗トイレの産業史－20世紀日本の見えざるイノベーション－』（名古屋大学出版会、2008）によると、1911年に設立された帝国製陶所が1917年に名古屋製陶所に改称し、1935年頃に最盛期を迎えた。1937年に名古屋製陶株式会社に改組改称し、名古屋市緑区鳴海町にドイツ式工場を建設している。48頁・49頁（注（89））には、1933年当時の本社及び工場（山田工場と弦月工場）の写真が掲載されている。同書に記載された会社概要には山田・弦月2工場が列記されているが、鳴海町に建設した鳴海工場の記載はない。そのため、両カタログとも、1933年から1937年までの段階の刊行物であると判断した。
- 52) 尿尿・下水研究会監修・こどもくらぶ編『トイレの自由研究 1 おしりを洗う習慣ができた！～起源・歴史・技術変遷編～』フレーベル館、2016、pp.16・17。
- 53) INAX 出版、2007。
- 54) 前掲注53) p.41。
- 55) 前掲注53) p.56。